

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：26301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24593454

研究課題名(和文) 20歳代女性のセクシャリティを育む子宮頸がん検診受診行動啓発プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the sexuality education program on uterine cervical cancer screening tests for women in their twenties.

研究代表者

中越 利佳 (Nakagoshi, Rika)

愛媛県立医療技術大学・保健科学部・講師(移行)

研究者番号：70551000

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20歳代女性の子宮頸がんに対する心理・社会的特徴を明らかにし、子宮頸がん予防冊子配布型啓発による効果を検証するものである。

子宮頸がん検診に対する思いは、「検診不安」、「リプロダクティブヘルス意識」、「検診煩わしさ」が抽出され、「リプロダクティブヘルス意識」が高い者は、子宮頸がん予防の理解と行動がとれることが明らかになった。そこで、リプロダクティブヘルス、セクシャリティ向上に着目した子宮頸がん予防パンフレットを作成し配布した。対象者の背景に即した内容の啓発媒体は、子宮頸がん予防の意識を向上させる効果が示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the relationship between social-behavioral background and personal concept in their 20s who underwent examination of screening test for cervical cancer, and to evaluate the effect by distribution of booklet for cervical cancer prevention.

The thought of the screening test for cervical cancer consisted of "personal concept for the reproductive health", and "anxiety for the examination of screening test", and "too much trouble for the cancer screening". The persons having experience of cervical cancer screening showed significantly high scores about "personal concept for the reproductive health" in comparison with inexperienced persons. Then, we created and distributed the booklet for the cervical cancer prevention which paid its attention to reproductive health and improvement in their sexuality. The effect that the booklet of the contents suitable for their 20s feature raised the consciousness of cervical cancer prevention was shown.

研究分野：母性看護学

キーワード：子宮頸がん 子宮頸がん予防教育 啓発プログラム リプロダクティブヘルス セクシャリティ 20歳代女性

1. 研究開始当初の背景

我が国における子宮頸がん罹患数は、女性特有のがんでは乳がんに次ぐ罹患率を示している。なかでも 20～30 歳代の罹患者数は、全体の約 25% を占めている¹⁾。発症のピークである 20 歳代後半～30 歳代後半は、女性の妊孕年齢に合致し、女性のライフサイクルにおけるセクシャルヘルス、リプロダクティブヘルスへの影響が大きい。

子宮頸がんの感染経路は性交渉による HPV 感染である。性交経験のある女性では誰でも感染する可能性があり、感染後 5 年～10 年をかけて進行する。高校 3 年生時点での初交経験率が約 20% を示し²⁾、10 代後半からの性行動が活発になる現状にあって、子宮頸がん発症が妊娠年齢 (20 代後半から 30 歳代) に重なることが避けられない状況にある。

子宮頸がんは、HPV ワクチン接種と子宮頸がん検診により予防と早期発見が可能である。2010 年より HPV 予防ワクチンが定期接種化されたが、副作用の報告から 2013 年、厚生労働省は子宮頸がん予防ワクチンの積極的勧奨中止勧告を行い、現在に至っている。したがって、早期発見・早期治療のためには、子宮頸がん検診 (以下検診) の受診率を上げることが必要不可欠である。我が国の 20 歳代の検診受診率は 26.1% と欧米諸国の 60～80% と比較し低率である。とりわけ、愛媛県における 20 歳代の検診受診率は 20% 以下であり、全国平均を下回っている¹⁾。

子宮頸がんは、女性のセクシャルヘルス、リプロダクティブヘルスに影響を及ぼし、若い女性の未来を脅かすがんである。ゆえに、若い女性のリプロダクティブヘルスとセクシャルヘルスへの意識を高め、「自分の性の健康は自分が守る」といった自己決定能力を育む支援が必要であると考えに至った。20 歳代女性の心理・社会的特徴をふまえた啓発プログラムの開発に着手する目的で本研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下である。

- (1) 20 歳代女性の子宮頸がん検診受診行動の実態と子宮頸がん予防の認知の実態を明らかにする。
- (2) 検診受診行動変容ステージとリプロダクティブヘルス、セクシャリティとの関連性を明らかにする。
- (3) 20 歳代女性の子宮頸がん検診に対する思いの構造を明らかにし、検診受診行動ステージ別の特徴を明らかにする。
- (4) 20 歳代女性の心理・社会的特徴をふまえた子宮頸がん予防啓発プログラムを開発する。

3. 研究の方法

上記の研究目的に基づいて、研究(1)、(2)、(3)を実施した。研究の取り組みを図 1 に示す。

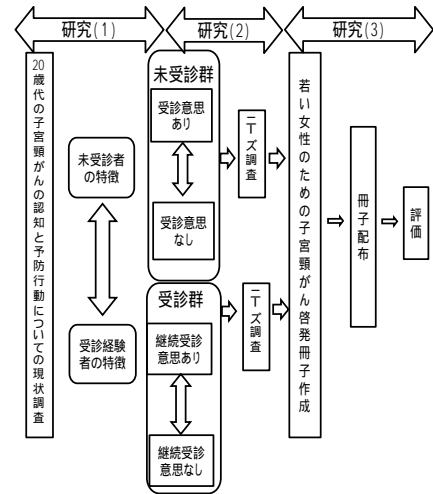


図 1

(研究 1)

愛媛県下の企業責任者および学校責任者の研究協力許可のあった施設に対し、20 歳代勤労女性と女子学生を対象とした無記名自記式アンケート調査を実施した。調査内容は、属性、TTM による検診受診行動変容ステージ、子宮頸がん予防の認知、子宮頸がん受診に関する思い、性イメージ、主観的健康観である。有効回答のあった勤労者 222 人、学生 501 名を分析対象とした。統計処理は、探索的因子分解、残差分析、分散分析を用いた。

(研究 2)

20 歳代女性を対象としたフォーカスグループインタビューを実施した。研究協力の得られた対象者を検診受診経験者と未受診者に分け、受診理由 (未受診理由)、受診のきっかけ、検診受診に対する思い、望ましい啓発活動内容と受診環境についてのニーズをインタビュー調査した。インタビューを録音し、逐語録をデータ化、文脈を意味内容で区切りコード化、類似性に基づいて抽象度を上げ、サブカテゴリー化、カテゴリー化し質的に分析した。

(研究 3)

研究(1)・(2)で明らかになった知見をもとに 20 歳～30 歳代をターゲットとした若い女性向けの子宮頸がん啓発冊子を作成し、大学生と愛媛県下の自治体、関係団体に配布。配布後、啓発冊子の評価として、アンケート調査を実施した。調査内容は、子宮頸がん予防の認知、子宮頸がん検診受診行動変容ステージ、子宮頸がん検診受診に対する思い、啓発冊子の印象に残った内容、感想等自由記載である。統計処理は探索的因子分解、分散分析、残差分析、コレスポネンス分析を用いた。自由記載内容については、文脈を意味内容で区切りコード化、類似性に基づいて抽象度を上げ、サブカテゴリー化、カテゴリー化し質的に分析した。

4. 研究成果

(研究1)

検診未受診者と受診経験者との比較

検診受診の実態と子宮頸がん予防の認知について

- ・勤労者の検診受診率は41%、学生の検診受診率は11%であり、全国平均と比較し、学生の受診率が低い。
- ・受診動機は、産婦人科受診時に医師から勧められた者が大半を占め、主体的に検診受診した者は少なかった。
- ・受診経験者は、親や友人など身近な人と性に関する話題があることが明らかになった。
- ・未受診理由では、勤労者では、「異常がない」、「時間が取れない」、「めんどくさい」が多く、学生では、「検診受診に抵抗がある」、「周囲に受けている人がいない」、「痛そう、怖い」、「性交経験なし」が多かった。
- ・子宮頸がん予防に関する知識は、受診経験者が未受診者に比較して高かったが、学生、勤労者ともに、HPVと子宮頸がんの関連性、HPVの感染経路、子宮頸がんの予後と治療についての知識は低かった。

検診受診に対する思いの構造について

- ・検診受診に対する思いは「リプロダクティブヘルス意識」、「検診結果不安」、「検診煩わしさ」の3因子が抽出された。
- ・受診経験者は「リプロダクティブヘルス意識」が高く、未受診者は「検診わずらわしさ」が高かった。

(研究2)

未受診者と受診経験者別受診行動変容ステージ比較

未受診者間の受診行動変容ステージ比較

- ・未受診者のうち、将来的に受診すると答えた者と将来的にも受診はしないと答えた者を比較した。その結果、受診すると答えた者はセクシャリティ得点が高く、自らのセクシャリティを肯定的にとらえるものが多かった。
- ・将来的に受診すると答えた者は、「行くつもりだったが、クーポン券に期限が切れていた」、「産婦人科受診のついでにクーポン券を使うつもり」といった意見が多く聞かれた。
- ・将来的にも受診しないと答えた者では、「体調不良ではない」、「めんどくさい」、「検診に自分の時間を使いたくない」、「仕事を早めに切り上げてまで、受診する気はない」といった意見が多く聞かれた。

受診経験者間の受診行動ステージ比較

- ・受診経験者のうち、定期的に検診受診を受ける意思がある者と受ける意思のない者を比較した。定期検診受診の

意思がある者は、ない者と比較して、「主観的健康観」が高く、「検診煩わしさ」が低い結果となった。

- ・定期検診受診の意思がない者は、「異常がないので行かない」、「異常でないのに内診は嫌」、「といったがんに対する脅威の希薄と検診への抵抗感が明らかになった。

望ましい受診環境

インタビュー調査の結果、以下のカテゴリーが抽出された。受診経験者、未受診者の共通のカテゴリーは、「検診義務化」、「受診時間の柔軟化」であった。受診経験者では、「クーポン券利用規制の柔軟化」、「催促状」となり、未受診者では、「女医」、「思春期教育」が抽出された。子宮頸がんも望まない妊娠や性感染症といった性教育として、高校生までに知っておきたかったという声が多く聞かれた。

(研究3)

子宮頸がん予防啓発冊子の作成と冊子配布による啓発活動の評価

啓発冊子の作成

研究1、2から得た知見から以下の内容が重点項目であると結論付けた。

- ・検診受診行動にいたるためには、対象者のセクシャリティを高め、リプロダクティブヘルスの向上を強調する必要がある。
- ・子宮頸がんの知識とがんの脅威を伝えるのではなく、がんの罹患により女性の将来がどのように変化をするか、検診により自分の目指す将来が守られることを伝えていく必要性がある。
- ・具体的な検診の方法を示すことにより、検診への不安を取り除くことが必要である。
- ・具体的な検診可能施設や相談窓口を示すことが必要である。
- ・子宮頸がん検診は恥ずかしいことではなく、自分自身を大切にしている行動であることを強調する必要がある。

以上の結論より、冊子の内容を以下のように構成した。また、若い女性が親しみやすいイラストや検診受診行動を自己決定できることを後押しするような表現方法を工夫した。

(冊子目次)

1. 軽やかに彼女が向かう先は
2. 子宮頸がんってどんな病気なの?
3. 人生の舵を取る彼女は輝いている
(人生設計と検診受診)
4. 「検診」って?
5. 「検査」って?
6. 子宮頸がん経験者からの Letter Message
7. 子宮頸がん Q&A
8. Message for you あなたの未来を守る検診のススメ

啓発冊子の評価

冊子を配布した自治体、大学の40歳未満の女性656名を対象に冊子評価に関するアンケート調査を実施し、以下の結果を得た。

- ・子宮頸がん予防の認知では、調査対象者の95%が理解したと答えた。
- ・25歳未満の対象者では、HPV感染と子宮頸がん、HPV感染経路、検診方法、検診受診施設について理解したと答えた者が多かった。
- ・検診受診行動変容ステージでは、25歳未満では、1年以内もしくは近い将来受診する、25歳以上では定期的に受診すると答えた者が多かった。
- ・印象に残った項目では、20歳未満が検診受診の自己決定、20-24歳は検診の方法、25-29歳はQ&A、30-34歳はがん患者の体験談に興味を持つ傾向を示した。
- ・子宮頸がん検診受診に対する思いの構造では、「内診抵抗感」、「女性に必要な検診」、「検診煩わしさ」が抽出された。
- ・「内診抵抗感」、「女性に必要な検診」、「検診煩わしさ」は、25歳未満が高く、また、勤労者よりも学生のほうがその傾向が強く、アンビバレントな状態であることが示された。

啓発冊子を配布することにより、25歳未満の若い対象者の子宮頸がん予防の認知を高め、受診態度の変化がみられたと考えられる。実際に検診受診できたかどうかの追跡調査は、時間の関係で証明することができなかったため、今後の課題とする。

若い対象者は、検診受診に対するアンビバレントな思いが強く、今後は対象者の特徴をより詳細に分析し、対象者の特徴に合わせた情報提供や検診受診に向けた支援を考察していく。

本啓発冊子は、一部自治体において成人式に配布されており、また、ピンクリボン愛媛の啓発活動にも活用されている。冊子評価で得られた結果をもとに、子宮頸がん予防の認知を高め、検診受診行動にいたることができるための啓発活動を今後も模索していく。

引用文献

- 1) がん対策情報センター：国民生活基礎調査による都道府県別がん検診受診データ、2013
- 2) 「若者の性」白書 第7回青少年の性行動全国調査報告、日本性教育協会編、小学館 2013

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

岡村絹代、中越利佳、則松良明、山口利子、大崎博之、愛媛県内における勤労女性の

子宮頸がん検診受診の現状と課題、愛媛県立医療技術大学紀要、査読無、第9巻1号、23-29、2012

岡村絹代、中越利佳、則松良明、20歳代勤労女性の子宮頸がん検診受診行動と関連要因の検討 四国公衆衛生学会雑誌、査読有、第58巻1号、152-159、2013

中越利佳、岡村絹代、則松良明、20歳代勤労女性の子宮頸がん検診受診の行動変容ステージと関連要因、母性衛生、査読有、第54巻1号、164-172、2013

中越利佳、岡村絹代、則松良明 20歳代女子学生の子宮頸がんに対する知識と検診受診行動ステージおよび検診受診に関連する要因の検討、四国公衆衛生学会雑誌、査読有、第60巻1号、109-117、2015

[学会発表](計8件)

中越利佳、今村朋子 医療系女子学生の子宮頸がん検診受診行動とリプロダクティブヘルス意識との関連性についての基礎的研究、第26回日本助産学会学術集会、2012.5.2、札幌市

岡村絹代、中越利佳、則松良明 若年女性の子宮頸がんに対する知識及び検診受診行動の要因、第71回日本公衆衛生学会学術集会、2012.10.25、山口市

中越利佳、岡村絹代、山口利子 勤労女性の子宮頸がん検診受診行動ステージと子宮頸がん検診に対する思いについての関連性、第32回日本看護科学学会学術集会、2012.11.30、東京都

中越利佳 20歳代勤労女性の子宮頸がん検診受診行動ステージと心理的要因の検討、第27回日本助産学会学術集会、2013.5.2、金沢市

中越利佳、岡村絹代 20歳代女性の子宮頸がんに関する認知と子宮頸がん検診受診行動ステージ 勤労女性と女子学生の比較から、第33回日本看護科学学会学術集会、2013.12.6、大阪市

中越利佳、20歳代女性の子宮頸がん検診受診行動ステージにおける子宮頸がん知識と心理的特徴および望ましい受診環境について、第28回日本助産学会学術集会、2014.3.22、長崎市

中越利佳、岡村絹代 20歳代女子学生の子宮頸がん検診受診行動ステージによる子宮頸がんに関する認知と望ましい受診環境、第40回日本看護研究学会、2014.8.22、奈良市

中越利佳、20歳代勤労女性の子宮頸がん検診に関する認知と望ましい受診環境、第35回日本看護科学学会学術集会、2015.12.6、広島市

中越利佳 子宮頸がん検診受診経験者が持つ子宮頸がんの認識と検診受診に対する思い、第30回日本助産学会学術集会、2016.3.20、京都市

中越利佳、看護学生の子宮頸がん予防に

関する認知と検診受診に対する思い、 第36
回日本看護科学学会学術集会、2016.12.11、
東京都

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中越利佳 (NAKAGOSHI, Rika)
愛媛県立医療技術大学・保健科学部・講師
研究者番号：70551000

(3) 連携研究者

岡村絹代 (OKAMURA, Kinuyo)
豊橋創造大学・保健医療学部・准教授
研究者番号：40465779

則松良明 (NORIMASTU, Yoshiaki)
愛媛県立医療技術大学・保健科学部・教授
研究者番号：90511189

山口利子 (YAMAGUCHI, Toshiko)
宝塚大学・看護学部・准教授
研究者番号：70174620

大崎博之 (OSAKI, Hiroyuki)
神戸大学大学院・保健学研究科・准教授
研究者番号：80438291